

## 2005年度 図書館の活動

### Topics (トピックス) コーナー開設 (図書館2階閲覧室)

学生にもっともっと図書館を、所蔵の資料を、図書館活用術を知ってもらおう!と、定期的にテーマを決めて、コーナーを設置している。

- (第1回) ファウスト (博物館特別展「ファウスト 伝説と作品」協賛) (9~10月)  
 (第2回) 論文・レポート作成に役立つ本 (11~1月)  
 (第3回) 各国の文化に触れる旅 (1~4月)



### 資料を通じて国際交流—海外大学へ日本語書籍寄贈—

中国杭州にある総合大学浙江財経学院が、2005年1月、日本文化与経済研究所を開設し、日本の文化や社会・経済、日本語学などの研究を開始された。その研究所長が本学の卒業生であることが縁で、日本語資料収集の協力要請を受け、図書館が窓口となり学内へ呼びかけ、教職員・学生ほかの協力を得て1500冊を寄贈することができた。

### 学生選書プロジェクト始動

昨年7月より館内に設置した意見箱『館長直々』には、「もっと今読みたい本を入れてほしい」という声が多数寄せられた。そこで学生利用者自らが、今必要としている本を提案できる仕組みを作ろうとプロジェクトを企画した。10月におこなった第1期募集には13名の応募があり、選考の結果現在8名の学生ボランティアスタッフが、図書購入・図書紹介などを行っている。



### 学生ボランティアスタッフの声

私は自分が読みたい本が大学にあればいいなという軽い気持ちでこのプロジェクトに参加しました。だから、先輩方のやる気に驚いて何もすることができませんでした。これから本格的に活動していきますが、自分に出来る仕事をしていきたいです。このプロジェクトに参加して、今まで出会えなかった大学の方と話す機会ができて本当によかったです。自分の世界が少し広がりました。短大生活でこのようなことに参加できたことがとても嬉しいです。

(短期大学部 文化学科 第1学年 荒田直子)

学生選書プロジェクトに参加して、図書館の新たな面を幾つも発見し、図書館に対する見方が変わりました。当初は、学生の為のプロジェクトであったのですが、現在、図書館と学生の更なる発展の為にプロジェクトを進めています。これから図書館には新しく、今までに無かった方面の本が入ってくる予定です。図書館から遠のいていた皆様が一寸でも興味を抱いて下されば、プロジェクトの一員として大変嬉しく思います。

(文学部 史学科 第1学年 佐川絵美)

私が図書選書プロジェクトをやってみようと思ったきっかけは、ある日図書館をふらふら散歩していると目にとまったプロジェクトメンバー募集の張り紙を見て、「おっ面白そうじゃん」と何故か、ときめいたからです。以前から、もっと図書館にいろんな本があったら良いのと思っていた私はやってみることに決意。本を選ぶ、そしてその宣伝をするということを通しメンバーの皆と話し合えたことは非常に良い経験になりました。そして今回メンバーのみなで考えて購入した本がこの図書館に所蔵されると思うと非常に嬉しい気持ちです。私は森山大道という写真家の『新宿』という本を推薦しました。森山大道という写真は日本の戦後から現代を通しての写真界に一つの革命を与えた写真家で、皆さんが写真というものを通した芸術、また文化の入り口としてもっとも適しているのではないかと思いますこれを推薦しました。この歴史、伝統が受け継がれゆく京都で生きる私たち。そんな私たちが、新宿という、成長が止まず、そしてすべてが恐るべきスピードで更新されるこの街を写真という形で見てみるのも良いのではないのでしょうか。

(文学部 真宗学科 第2学年 川上源太)

大学の図書館＝専門書ばかりというイメージを改めたい、学生にとって本を身近な存在にしたい。そう思ってこのプロジェクトに参加しました。音楽をかける、コーヒーを飲んで一服する。そういう感覚で本を読んでほしい。そして、いろんなジャンルの本を知ってほしいと思ったので、小説のほかに写真集や画集を選びました。図書館が「ああ、こういう本もあるんだ」「もっと面白い本があるよ」と、そんな風に本について話すことのできる空間となれば良いと願っています。

(文学部 史学科 第2学年 奥田育実)

私は大学コンソーシアムで、他大学の図書館に入る機会があり、興味のある本をたくさん見つけ、大谷大学にも欲しいなと思っていた時に、今回このような企画を大学側から出していただき、参加することができました。どのような本が欲しいか、学生の視点から見つても、違う学科や違う学年から色んな意見がでていて、みんな思いおもいにこの企画に参加したことを改めて感じました。私は今回この企画に参加できたことを光栄に思っています。

(文学部 国際文化学科 第2学年 竹中ゆり)

大学図書館に興味の本がないことについて以前から疑問を持っていたので、選書プロジェクトが発足した時にはとても画期的だと思いました。どうせなら自分で読みたい本を選びたいと、選書員に応募して、今は他の選書員の皆さんと何度も会議を行い話し合っています。活動は今でも手探りですが、選書員ひとりひとりの発言も多くなってきましたし、ぼんやりと形が見え始めたと感じています。選書プロジェクトがこの先も続いていくように、次へつながる活動を目指していきたいです。

(文学部 文学科 第3学年 立端あずさ)

活動は主に、読みたい本、みんなに紹介していきたい本を選び、図書館に置けるようにすることです。メンバー一人一人責任をもって本を選んでいきます。もう一つ、大事な活動として、他の学生にこのプロジェクトを知ってもらうためのPR活動があります。現在特にこの活動に力を入れて取り組んでいます。立て看板、ポスターを制作し、PRすることになりました。メンバーの特技や個性を駆使し、活かして、着実に形になってきています。

(文学部 社会学科 第3学年 岩下麻由)

本が読めない若者が増えている。事実、本を読めない、と笑いながら口にしている学生も多い。何故だろう。本や活字に価値を見出だせないのだろうか？だとすれば、それは正しい。が、本質を見失っている。本に価値などなく、その中に活字として込められた思考を相手に「自ら考える」ことに価値があるのだ。本を手に取り開いてみれば、アナタは知の広野にであうだろう。そこで何をどう考えるかは、アナタの自由であり任意である。

(文学部 哲学科 第4学年 松尾将吾)

---